題材群開発プロジェクト
：［オルタナティブ・ドローイング］解題
題材をならべて－みること
：［オルタナティブ・サマリーズ］

北野　諒
KITANO, Ryo
京都造形芸術大学　研究員

■プロフィール
1985年大阪生。和歌山大学教育学部を卒業の後、京都造形芸術大学大学院を修了。2011年より同大学にて研究員として勤務し、鑑賞教育の研究／実践を行う一方、アーティストとしての制作活動も行っている。主な論文に「ACOP－対話型鑑賞の基礎的考察――共同体－外的学びへの試論」（『GNESIS16』、京都造形芸術大学紀要、2012）、主な展覧会に「藤本由紀夫+北野諒　約100台の電子メトロノームを使って制作をする」（ART ZONE、京都、2010）など。

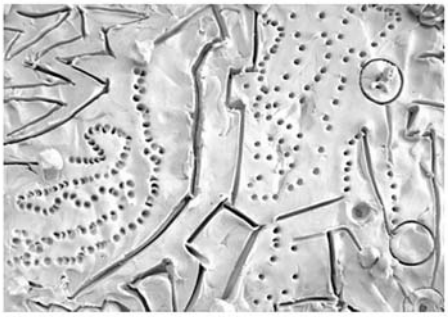
1．はじめに

本稿では、和歌山大学美術教育研究会誌『美術教育実践研究』第一号（2012）にて掲載された題材群の要約を行う。研究会の活動は「絵画教育の再生」という主題のもとに、「オルタナティブ・ドローイング」と「歴史的絵画様式のシークエンス」の2つの題材群の連なりを形成しているが、ここでは特に前者を紹介する。以下の要約を通して、各題材の背景を貫くコンセプトも自ずと浮かび上がってくることになるだろう。

2．オルタナティブ・ドローイング

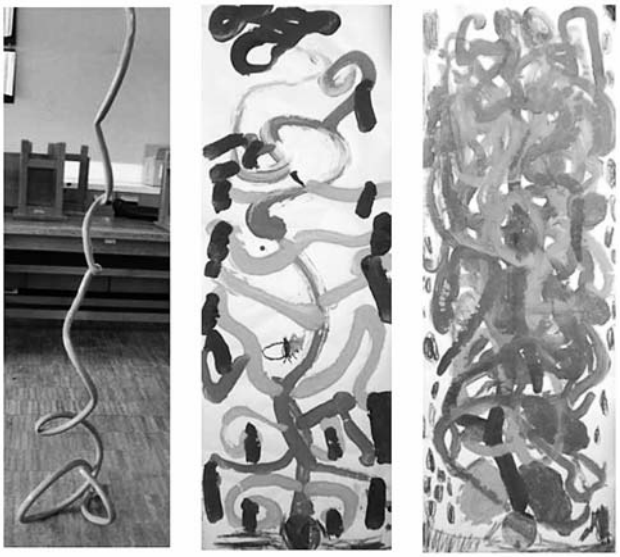
■「ねんどの島にめいろをつくって」

粘土板に押し広げた油粘土に、手で直接、あるいはヘラ・ビー玉・クリップといった道具類を用いて、多様な線を刻んでいく。「めいろ」という設定を与えることで、記号的な表現（キャラクターなど）に陥らないようする一方、「島」という設定によって、線を道や川に見立てることや、何がしかの物語を想像することが促されている。身体感覚に訴えかける粘土の物質性から、視覚的な「線」へと移行する、イントロダクションとなる題材である。



■「生命の曲線を表現しよう」

プロペラのような羽を持つニワウルシの種子の舞落ちる様子を観察し、その軌跡を身体で表現したり、針金を通したゴムホースを用いて立体で再現したりする。その後、種子から生えてくる植物を想像し、絵であらわす活動を行う。物質性と視覚性、鑑賞と制作、身体／立体／平面、と諸領域を往還しつつ展開する、複合的な題材である。また本題材では、前半の「造形遊び」的活動（種子の観察や身体／立体表現）を行わなかった場合、後半の描画活動が記号的表現に偏りがちになることが研究授業により明らかになっており、「造形遊び」と「絵画教育」の互恵的関係についても示唆している。



■「芒・蒲を描く」

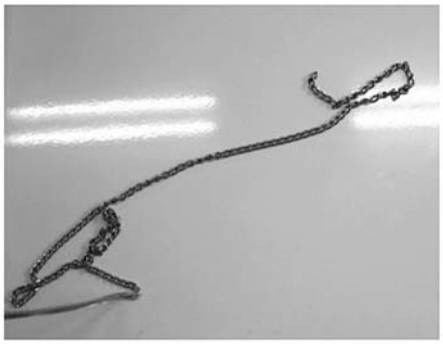
刷毛を用いて、大きな模造紙の画面いっぱいに墨で線を描き、芒や蒲の草むらを表現する。紙に描く前に、水を含ませた刷毛を用いて、黒板で試し描きをすることで、全身を使った動きを充分に引き出すことができる。また、出来上がった線の画面に、芒や蒲の「穂」を描きたしていくことで、物質的／身体的な線の世界を、再び視覚的／絵画的に解釈して捉え直していく作業を行う。

■「草花で仮名文字ドローイング」

校庭で草花を収集し、仮名文字を形作る。各文字をデジカメで撮影し、組み合わせて「いろは歌」の順にならべてみる。ドローイングにおける、物質性と視覚性との引き裂かれ、あるいはその矛盾の調停が、もっとも顕著に焦点化しているものの一つとして「文字」があげられるだろう。特に仮名文字においては、それが象徴（シンボル）でありながら同時に図像（イメージ）であるような状態として顕在化している。本題材はドローイングという概念を根底から再考させる、豊かな問題系を含むものであるといえる。

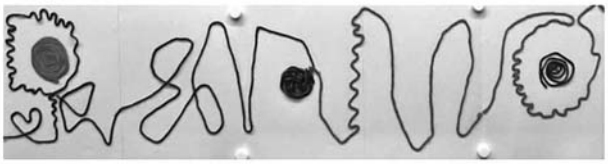
■「鎖でドローイング」

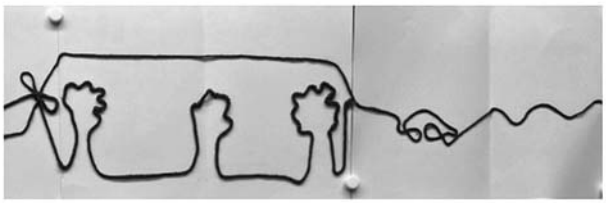
プラスチック製の白いボードの上に、細い金属の鎖を、さながらポロックのポーリングのように垂らして、偶然性にみちた多様な線の形を体験する。ドローイングにおける「行為性」をもっともシンプルに経験することが企図された題材であり、写真／映像による編集や、この体験を踏まえて描画に移行するなど、より発展的な題材との連係が展望できるだろう。



■「毛糸でドローイング」

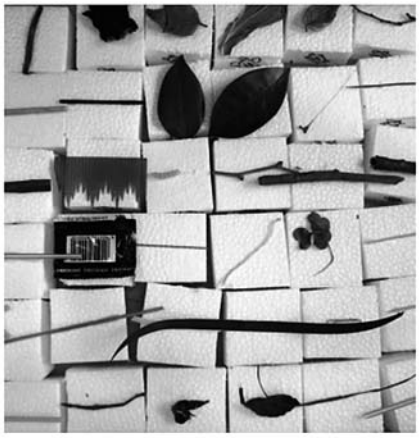
２色の毛糸を選び、画用紙に接着していくことで、ドローイングを試みる。画用紙をつづら折りにして繋げ、２本の線が織りなす物語を想像しながら制作する。毛糸の物質感が、様々な線の表現を促す一方、絵本やアニメーションを思わせる形式を設定することで、物質的な線から解釈や想像を広げることが自然に導かれている。物語との組み合わせや、オノマトペによる線の表現など、鑑賞活動・言語活動への展開が期待できる題材である。





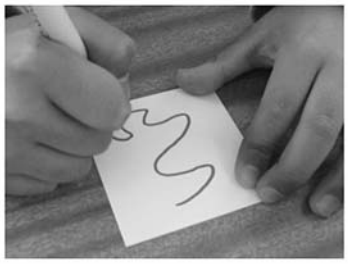
■「線の標本」

７センチ角の発砲スチロールの「台座」を用意し、身の回りにあるものを「線」に見立てて、収集活動を行う。見ること・言語化すること（鑑賞活動）が、そのままオブジェやイメージを作ること（制作活動）でもあるという体験を、非常にシンプルな形で提示することができる。また、博物学的手法や、デュシャン以降のコンセプチュアル・アートの方法論にリファレンスを広げながら、ドローイングとの関係性を探っていく試みであるともいえるだろう。



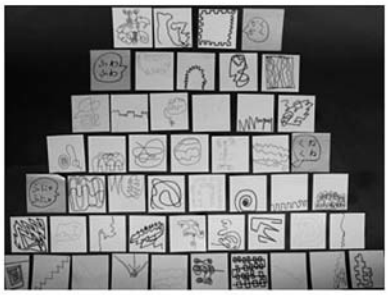
■「線のタイル」

模造紙いっぱいに、全身を使って線描を行う活動から導入し、最終的に７センチ四方のカードに多様な線を表現して「線のタイル」を制作する。模造紙での線描を、部分的にフレームで切り取って眺めてみたり、出来上がったタイルをあるテーマのもとで並べかえてみたりと、制作と鑑賞との、あるいは線の物質性と視覚性との往還がつねに行われている。



■「線をならべて－みること」

筆者が提案した、オルタナティブ・ドローイングの題材群における汎用的な鑑賞プログラムである。成果物をあるテーマのもとでならべて（体系化して）－みることで、鑑賞が再解釈／再創造の活動として機能することを企図している。すでに上記の要約中にも散見されるが、具体的な活動としては、線の作品を並べてタイトル／キャッチコピーを付してみる、といった方法が挙げられる。より個々の作品が自律的になるにつれ、最終的には作品をキュレーションして展示する「展覧会」（という絵画を支える形式）として成立するようになるだろう。



３．題材をならべて－みること

以上、計９題材の要約を概観してきた。これらを踏まえ、オルタナティブ・ドローイング題材群のコンセプトを（幾分の単純化を孕みつつも）改めて整理するなれば、それは「造形遊び」と「絵画教育」の発展的接続であり、美術教育におけるモダニズムの再起動の試みであると、さしあたり要約できるだろう。

こうして題材をならべて－みることは、一方でそれらのシークエンスを構成する論理を明確化する作業であり、他方でしかし、ならべかえて－みることへの想像が触発される作業でもある。本稿が、題材群の簡潔な紹介として、あるいは別のありえた組み合わせや、他のありうる題材案への媒介として――いわば「オルタナティブ・サマリーズ」として機能すれば幸いである。